

〈論文要旨〉

90年代から2000年代にかけて三浦展や宮台真司らによって郊外住宅地の人工性の高さや均質さが指摘されていたが、これらの郊外論の多くは郊外を外側から眺めた印象に基づくものが多く、人々の生活や客観的事実に対する視点を欠いたものであった。2000年代に入るとそれまでの外部から見た郊外論とは異なる、住民としての内側からの目を持った郊外研究が若林幹夫を中心になされるようになり、今日に至るまで郊外は都市計画、ジェンダー、鉄道史、そして映画など様々な角度から論じられてきた。しかしながら従来の郊外研究では実際の郊外住宅地がもたらす「不安」「緊張」「孤独」といった否定的な感情・感覚に関しては言及が避けられており、その要因はおそらく郊外住宅地における否定的な感覚について論じることが、人々が既に暮らしている郊外という場所を否定することにつながると判断されてきたからである。

本論では郊外住宅地という空間において住民の身体や行動が制度によって支配されていることと、そのような空間が人々に与える否定的な感情を自明のものとして提示したうえで、特異な空間であるからこそ生じる物同士の独得のつながりを「結晶化」と名付け、結晶そのもの、あるいは住宅地を歩く時間を通して、そこでしか享受することのできない非現実的な体験があることを主張する。

研究方法としては、約8年間にわたり断続的に三重県津市郊外において撮影と観察を行い、郊外住宅地の現状とどのように変化していったのかを分析した。住民に必要以上に不安を与えないために、撮影は通学途中の子どもや通勤者などのいない平日の昼間に行った。本論ではこれまでに撮影した写真を資料として用いているが、写真の季節や気候にばらつきをもたせることで住宅地の様々な姿を提示するという目的もある。

第1章ではまず今日の日本における郊外住宅地がどのような場所であるのかということを示すために、筆者の育った三重県津市の新興住宅地とその周辺にパッチワーク状に広がる70年代から2020年代にかけて開発されたさまざまな住宅地とその特徴を示す。そして筆者が日頃どのように撮影を行なっているのかについて言及したうえで、「結晶化」を見出す過程について説明し、そうした結晶を記録することに付き纏う「他人の生活を盗み見ている」という罪悪感に対して、世界と自己とのつながりを根拠に向き合っていることを論じる。

第2章では、はじめに石井聰互監督による『逆噴射家族』（1984）を例に、郊外住宅地がメディアを通していかに「イメージの小さな断片」として広まっているかを指摘し、そのような事態が我々に郊外住宅地を「よく似た家が建ち並ぶ均質な場所」という記号で見るよう促していることを明らかにする。そして住宅地が実際には「家が並んでいるだけ」ではない、ある程度の複雑さをもった空間であることを津市の80年代に開発された住宅地Bを例に

検証していく。検証を通して、合理主義と資本主義が結びつくことで生まれた「郊外住宅地」という制度が、いかに住民の身体や行為を制限しているかを実証しながら、同時に管理された空間がもたらす超越的な体験について論じる。

第3章では2020年ごろから筆者が取り組んできた合成写真の制作について見ていく。筆者は住宅地で撮影した写真と別で撮影した氷の写真とを組み合わせた合成写真を制作してきたが、本章では工程一つ一つがもつ意味と、生成されたイメージが観る者に与える作用について考察していく。

調査・研究を通して現実の郊外住宅地において制度がいかに隅々にまで浸透しているかということ、そして制度による支配が住民の目を住宅地からどのように逸らしているのかを明らかにした。同時に都市や農村と比べて変化の見えにくい場所であるがゆえに、住民によって設置された物や公共の事物が「見られること」を自覚することなく、人々の意識を貼り付けたままゆっくりと静かに変化しつづけていることを示した。そのままの住宅地の写真を通してでは伝わりにくい結晶化した事物のあり方を他者に伝えるために筆者は2020年ごろから合成写真という手段を用いて制作を行ってきた。最終章では制作への考察を通して、合成という手法が、結晶化した事物の不可思議なあり方を他者にとっても共感可能なものへと変化させることの有効性について明らかにした。